



Elvis costello
&
Burt bacharach



Painted from memory

皆さんはエルヴィスコステロというアーティストをご存じだろうか？ 彼は1977年にデビューして以来、コンスタントにヒット作を出してきた。特に最近では映画「ノッティングヒルの恋人」の主題歌『she』や、テレビドラマ「空から降る一億の星」の主題歌『smile』などのヒット作がある。名前は知らなくても彼の曲を聴いたことのある人は多いであろう。

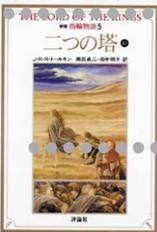
ここではその彼のアルバム『Painted from memory』を紹介しよう。1998年に発表されたこの作品では終始落ち着いたメロディーが展開される。最初の曲『In the darkest place』に始まり、全体

的に盛り上がりがないかもしれない。「お、盛り上がってきた、そろそろサビかな？」とか思って聞いていると、また静かな感じになっていくのだ。一回聴いただけではこのアルバムを全て味わったことにはならないだろう。中途半端な感じが最初はあまり印象良くないのかもしれない。しかし、何度も聴いているうちにじわじわ効いてくると言った感じだろうか、気がつけば病みつきになって中毒者になってしまうような一枚なのだ。

彼の曲の魅力はその歌声にもあるだろう。簡単に言えば中途半端な声というか、なんか「詰まった」感じの歌声だ。決してきれいな声ではない、むしろ突然かす

れたりしてしまって汚い感じもする声だ。しかし、そういう声がなぜリスナーの心理をくすぐるのだ。軽い感じは全く受けることのない、エルヴィスコステロの歌声はそれ以上の大人な感じがする歌声なのだ。皆さんにはぜひこの「微妙な」歌声も堪能してほしい。

これまで彼の作品の良さについていろいろ語ってきたが、皆さんも聴いてみればわかるだろう。言葉で表現するよりも耳で感じてほしい。彼の歌声、メロディが気に入る人は多いはずだ。この独特の雰囲気はこれからの冬のシーズンにもびったりな作品であるといえるだろう。冬の夜に一人で聞くとまた一味出る一枚である。本当に一押し！



新版 指輪物語

原作：J・R・R・トールキン 和訳：瀬田貞二・田中明子



あなたは指輪物語を知っているだろうか？ これを知らなくても、かの有名な映画「ロード・オブ・ザ・リング」を知っている人は多いはずだ。指輪物語はこの映画の原作で、本格ファンタジーの最高傑作である。そしてまた、現代のファンタジーの流れの基礎といわれている。

「ひとつの指輪は全てをたばね、ひとつの指輪は全てを捕らえ、暗闇の中につなぎ止める。暗闇のモルドールの国に」という一文で始まるこの物語は、妖精や小人、妖怪などが存在する世界、ミドル・アースが舞台。世界を破滅させる魔力を秘めた冥王の指輪を「死の火山」に捨てに行く小人族ホビット、フロドとその仲間たちの冒険譚である。養父のビルボが

ら指輪を受け継いだフロドは、それに支配されてゆきながらも、旅の目的地、「死の火山」へと着実に近づいてゆく。指輪を捨てるために結成された仲間たちが築いた友情の果てに訪れる別離。勇気と知恵で危機を乗り越え、甘い言葉に惑わされての裏切り。そして、フロドは「死の火山」へとたどり着く。しかしそこで彼は指輪を捨てるどころか、それを自分の物にしようとするのだ。指輪は、冥王の手に渡ってしまうのか？ フロドはどうなるのか？ 結末は、自分の目で確かめてほしい。

この物語には、ファンタジーではないリアルな感情がいたるところにちりばめられている。それを支えているのが、物

語の根底にある綿密に構成された設定だ。作者はイギリスの大学教授で、言語学、古文学、伝承学を専攻していた。この物語は彼の広く深い知識に裏打ちされており、それがどれほど時代が移り変わろうとも、いつまでも変わらない人間の「感情」を生き生きと描き出している。

ファンタジーを好きな人はともかく、そうでない人なら「長ったらしくて、読むのが大変」だとか「固有名詞の羅列で意味が分からない」といった思いを抱くかもしれない。しかし、その思いを抱かせない力がこの物語にはある。また映画には盛り込まれなかった挿話もあり、映画のみを見た人でも、もう一度何かを感じることができるはずだ。とても長い物語ではあるが、一度挑戦するつもりで読んでみてほしい。今一度、忘れかけている感情を呼び覚ましてくれることだろう。(とぺっと)

はみだし
すてーじ

12月 実家は雪で 埋まってる
⇒すばらしい俳句ですね！

(文・1 ゆっちゃん)
(一瞬気がつかなかった…；編)